

香川県地域おこし協力隊 活動報告書

地域おこし協力隊コーディネーターとしての取り組み

香川県政策部地域活力推進課

秋吉直樹



目次

まえがき

第一章 地域おこし協力隊コーディネーターってなんだ？

コーディネーターの役割

ミニコラム コーディネーターあるある『「お裾分け」とかない...』

第二章 香川県地域おこし協力隊コーディネーターの取り組み

さぬきの輪の集い

メディア：さぬきの輪 WEB&TIMES

さぬきの輪座談会

さぬきの輪 TERACOYA

さぬきの輪そろばん教室

第三章 香川県地域おこし協力隊本気宣言

地域おこし協力隊本気宣言

導入目的明確化会議

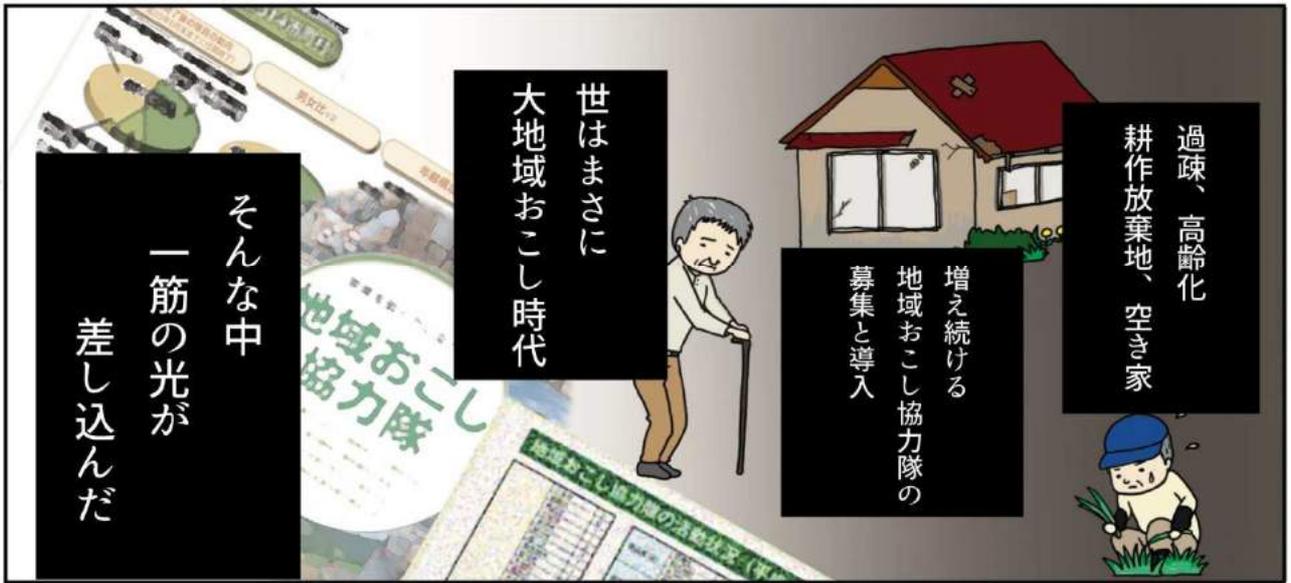
第四章 今後の課題と取り組み

今後の課題 1 「コーディネーターの必要性の確立」

今後の課題 2 「OBOG とのさらなる連携」

今後の課題 3 「地域おこし協力隊コーディネーター事業の主体」

おわりに



まえがき

地域おこし協力隊は、希望の光。

空き家がゲストハウスやカフェに変わり、耕作放棄地が棚田に変わる。地場産業の新しい担い手が生まれ、新しい観光の魅力を作り出す。全国の地域おこし協力隊の活躍に目を向ければ、その可能性に驚かされます。全国各地で地域おこし協力隊の募集・導入が進み、その数は着実に増え続けています。平成21年に89名からスタートした協力隊は、平成29年度現在では4,000名を超えました。数が増えるにしたがって、豊かになってきた協力隊の多様性。決まったミッションが無いフリーミッションタイプや、地域側で課題が設定されているミッションタイプ。起業前提タイプや定住前提タイプなど、3年後を見据えたタイプも数多く見受けられるようになりました。こうした多様化が進むに連れて、必要視されるようになったのが地域おこし協力隊のコーディネーターという役割です。地域によって抱えている課題も違えば、地域おこし協力隊それぞれが持っている価値観も違う。地域、協力隊、行政それぞれに思いがあって、それらが多様化している中、3者の足並みを揃えて、1つの方向に進んでいくのは容易ではありません。バランスを上手にとりながら、地域のビジョン実現に向けてサポートする役割がますます大きくなっていくのではないのでしょうか。

本書は、全国に先駆けて地域おこし協力隊コーディネーターを配置した香川県の取り組みを報告するものです。コーディネーターとして、2年半活動してきた経験を基にまとめさせていただきました。「新しいポジション」として注目を浴びることも多かったですが、一方で、試行錯誤を繰り返す苦しい2年半だったとも感じています。全国どこを見渡しても、前例はありません。本書は、香川県が、そして筆者が迷いながら実践した「等身大の2年半」をまとめたものです。全国で活躍する地域おこし協力隊が、より輝いて、地域にとって希望の光となるための一助を、少しでも担えたら幸いです。

香川県地域おこし協力隊 秋吉直樹



OK!
 それじゃあ
 大きく分けて二つの
 役割を説明するよ!

協力隊との付き合いで悩んだら
 「コーディネーター」の出番さ!

ガッチリまとめるくん
 (強カタイプ)

そして
 補強剂的役割

「寄り添う」と「補う」
 2つの成分で
 ガッチリサポート!

ガシッ

ピタッとくっつくくん
 (粘着タイプ)

まずは
 接着剂的役割

地域おこし協力隊に
 関わる人同士をピタッと
 くっつけるよ!

ねとん

なんと
 この2つの役割が
 あなたの元に!

このチャンスに
 今すぐご依頼を!

ますます
 怪しい!

第一章 地域おこし協力隊コーディネーターってなんだ？

「地域おこし協力隊コーディネーターって、どんなことをしてるんですか？」この2年半で、数えきれないほど質問された。地域おこし協力隊でさえ、まだまだ世間からの認知度が低いのに関わらず、「コーディネーター」がくつつくと、さらに難しいイメージになることは否めない。地域おこし協力隊コーディネーターには一体どんな役割があるのか？まずはその部分についてまとめた。

コーディネーターの役割

「接着剤」と「補強剤」

地域おこし協力隊の役割は大きく分けて2つ。「**接着剂的役割**」と「**補強剂的役割**」。本章では、それぞれの考え方をまとめ、次章以降で、具体的な取り組みについてまとめる。

「**接着剂的役割**」は、地域おこし協力隊に関わる人同士をくっつける役割。地域・行政・隊員の3者を上手にくっつけることはもちろん、地域住民同士、行政担当者同士、隊員同士の、行政区域を越えた接着を促すことが、大切な役割の1つ。地域おこし協力隊が地域で輝くためには、3者の連携が必要不可欠。やる気のある隊員だけでもダメだし、熱心な行政担当者だけでも上手くいかない。どれか1者が欠けてしまっても、バランスが崩れ、地域おこし協力隊が持つ最大限の可能性を発揮することが難しくなってしまう。こうした3者の想いを、しっかりと汲みながら足並みを揃えていく。**お互いの役割をきちんと理解し、役割に合った取り組みが淀みなく行われるように調整する**のが、地域おこし協力隊コーディネーターの大切な役割。

「寄り添う」と「補う」

「**補強剂的役割**」は「サポート」とも言い換えられる。地域おこし協力隊コーディネーターのサポート業務は2つに大別できる。「**寄り添うサポート**」と「**補うサポート**」。

「**寄り添うサポート**」とは、文字通り、隊員・行政担当者・地域住民の想いに寄り添うもの。それぞれの悩みや課題に向き合い、それらの解決に向けて寄り添う。時には、お互いに直接言い難いことを、コーディネーターを介して伝えることもある。**課題に寄り添い、直接的な当事者では無いからこそできる発想を用いて共に向き合う**。「人」が中心の事業である地域おこし協力隊のサポートにおいて、最も重要な役割。

「**補うサポート**」とは、地域おこしに必要な知識やスキル、気構えなどを補っていくもの。様々な方法があり、講師を招いた研修の開催や先進地への視察、協力隊OBOGとの交流会、関係者を集めた座談会を実施した。色々な方法で、**隊員、担当者、住民それぞれが必要な情報に触れる機会を設けてきた**。

「接着剤」と「補強剤」に共通するもの

「接着剂的役割」と「補強剂的役割」。それぞれの役割は違うが、2つに共通するのは、**それ自身が主役ではないということ**。接着剤は、くっつけるモノがあって初めて価値が生まれるし、補強剤もそれだけでは機能しない。あくまで主役はくっつけられるモノ、補強されるモノ。地域おこし協力隊コーディネーターも全く同じ。主役は現場で活躍する地域おこし協力隊。現場で奮闘する地域おこし協力隊と、それに関わる行政担当者や地域住民が生き活きと輝くための役割。**それぞれが輝きながら、地域のビジョンに向かって取り組みを進めるための役割**。

ミニコラム『「お裾分け」とかない...』

「ご近所さんからお裾分けもらいました！」地方への移住あるあるの1つ。正直、香川県の地域おこし協力隊（私）には、お裾分けはほとんど無縁の話…。何せ私の住む高松市街は、四国の玄関と言われるほどの都市で、いわゆる「田舎暮らし」を微塵も感じさせない暮らしができる。「地域の方から野菜やお魚をたくさんもらうから、食費はほとんどかからないよ！」外食、コンビニ食が当たり前の私にとって、一度でいいから言ってみたい言葉の1つ…（笑）



第二章 香川県地域おこし協力隊コーディネーターの取り組み

ここからは香川県の具体的な取り組みを紹介していきたい。接着剂的役割、補強剂的役割、それぞれを意識しながら、こちらから提案し実践したのもあれば、地域住民、協力隊、行政職員からの要望を受けて実現したものもある。地域おこし協力隊コーディネーターとして試行錯誤しながら、少しずつカタチにしていった事業についてまとめた。



接着剤①さぬきの輪の集い

県内の地域おこし協力隊及び集落支援員を集めた月に一度の意見交換会。各地域おこし協力隊が活動する現場に集まり、取り組みの見学・体験や、地域の方を交えて情報交換を行った。これは地域おこし協力隊コーディネーターとして行った、最初の事業。当初、手探りながらスタートしたが、結果的に一番重要な役割を持った事業となった。この事業が担う役割はたくさんあるが、ここでは特に重要な4つの役割について紹介する。

さぬきの輪の集いデータ（2015/9～2018/2 延べ）

実施回数	協力隊参加者	行政職員参加者	住民参加者
20回	233人	51人	19人

1：整理してアウトプットする機会

各地域おこし協力隊の活動現場を、順番に回りながら開催しているさぬきの輪の集い。その都度、開催地の地域おこし協力隊に、参加者への活動報告を依頼している。「普段、どんな活動をしているのか」を発表する機会を、半ば強制的に設けていることになる。日頃、地域おこし協力隊は、毎日の活動に追われることはあっても、自身の活動について発表する機会は少ない。「どんなゴールを目指しているのか」「そのために、どんな事をしていくつもりなのか」「今はどんな事をしているのか」などなど、発表するためには、自分自身の中できちんと整理されている必要がある。3年間という短い期間で、一定の成果を求められる地域おこし協力隊にとって、自分の想いをきちんと整理できているのと、そうでないのでは、結果に大きな差が出てくるのは、想像に難くない。こうした機会を捉えて、**自分自身の活動の意義や目的をきちんと整理することは、今後の計画的な活動につながると考えている**。発表を任せられた地域おこし協力隊は、最初はみんな口をそろえて、「やりたくない」「発表するほどのことはできていない」と話すが、実際に発表した後には「自分の活動の意義や目的を改めて確認できた」「やってよかった」と話してくれる。同じ地域おこし協力隊に向けた、ある意味、身内への発表ではあるが、**自分の言葉で、自分の活動を整理して発表する機会はとても重要**。たくさんのステークホルダーと、連携しながら活動を行っていく必要がある地域おこし協力隊にとってはなおさら。自分の言葉を使って、自分以外の人間に説明し、共感を得ながら目標に向かって歩みを進める。そのための整理とアウトプット機能を、さぬきの輪の集いは担っている。

2：知識・スキル・課題を共有

地域おこし協力隊は、様々なバックグラウンドを持っている。デザイナーやエンジニア、観光業や飲食業など、香川県内だけで考えても、バラエティに富んだメンバーがいる。そうしたキャリアやスキルを活かした活動に取り組めるのも、地域おこし協力隊の特徴の1つ。月に一度、顔を合わせるさぬきの輪の集いには、こうした**地域おこし協力隊の知識やスキルを、共有する機能も備わっている**。それぞれの持

つ知識やスキルを、それぞれの活動だけに留まらずに、県内の仲間に共有するきっかけを作っている。

取り組んでいることは違えど、「農業」「食」「観光」「情報発信」「空き家対策」など、共通テーマを持っている地域おこし協力隊は多い。**自分と同じテーマで活動している地域おこし協力隊の事例を知るとは、自身の活動をブラッシュアップすることにつながる。**例えば、農業に取り組んでいる地域おこし協力隊の場合、それぞれで畑の管理方法や栽培方法等を工夫している。そうした工夫を共有することは、それぞれの畑でさらに質の高い農業を実践していくことにつながっている。

自分と違うテーマの活動を知ること、活動の幅を広げるために重要。自身の取り組みに新しい要素を加えることができるし、斬新なアイデアにつながることもある。横の連携を活かして、それぞれの得意を活かした企画を生み出すことも可能だ。

実際に香川県では、さぬきの輪の集いで生まれた横のつながりから、様々な企画が生まれている。県内各種マルシェに、それぞれの地域産品を持ち寄って地域おこし協力隊ブースとして出店したり、獣害に悩む地域の協力隊同士で情報プラットフォームを制作したりしている。どれも「同じ思いであれば、何か一緒にできないか」という発想から生まれたものだ。単独では実現しなかった規模感やPRにつながっている。これからもこうした横の連携は増えていくだろう。

多様な知識・スキルを持つ地域おこし協力隊だからこそ、それらを共有することでより魅力的な活動を行うことにつながる。**月に一度、顔を合わせてお互いの事を良く知ることのできる「さぬきの輪の集い」は、そうした連携体制づくりに大きく貢献している事業といえる。**

3：協力隊のつながりを地域住民が体感できる

地域おこし協力隊の特徴の1つとして、地域外の人間との接点が多いことが挙げられる。これまで地域の外にいたので、地域外の人脈があるのはもちろんのことだが、それだけに留まらず、地域おこし協力隊には研修や視察などで全国の仲間とつながるきっかけがたくさんある。そうしたつながりを活かした発想や視点で、斬新な取り組みを行えるのも地域おこし協力隊の強み。

しかし、地域住民の方からそうした特徴・強みを、なかなか理解していただけないこともある。それ故に、地域の外に出る事の必要性を感じていただかず、地域外に出る事や地域外の人間と交流を、良く思っていないケースがあるほど。

さぬきの輪の集いには、こうしたズレを解消する機能がある。自分の地域以外の地域おこし協力隊が、20人近く訪れる機会は、地域にとっては大きなイベント。まして、20~40代という若い世代の、それも地域おこしに取り組む人たちが集まる機会は滅多にない。そうしたシチュエーションだけでも面白がっていただけるのだが、そこに、地域おこし協力隊と地域の方との意見交換の機会が加わると、更に喜んでいただける。**地域外の人と交流することの楽しさや重要性を、地域の方に体感していただくことが**

できるのだ。こうした体験ができること、**地域おこし協力隊が地域外とつながりを持っていること、そして、それこそが彼らの強みの1つということ**を認識していただきやすくなる。この認識がベースにできると、地域における地域おこし協力隊の役割にも良い影響が出てくる。地域おこし協力隊は、ずっと地域の中にこもりながら活動するのではなく、地域の外に出て、そこから生まれるつながりや発想を地域に還元するという役割を担いやすくなるのだ。いわば地域の外交官。そうした動きを、地域の理解のうえに行えるというのは非常に有意義なこと。**それぞれがそれぞれの役割を全うし合いながら、地域を盛り上げるきっかけにもなりうる**。さめきの輪の集いは、地域公認の外交官を生み出すきっかけにもなっている。

4：協力隊同士の絆が深まる

さめきの輪の集いは、**お互いの連帯感や絆の向上にも機能している**。月に一度顔を合わせてお互いの状況をシェアしていくうちに、自然と連帯感が生まれ、信頼関係で結ばれた絆が深まっていく。中にはプライベートでも、度々会うようになったという仲間もいる。こうした絆は、それぞれの活動にも良い影響を与えている。**一番影響がある部分が「踏ん張り力」**。地域おこし協力隊は、最大3年間という期間が設けられているが、任期途中で辞めてしまう人も少なくない。実際に香川県でも私と同じ年度に着任した方は10名ほどいたが、現在は半数以下しか残っていない。もちろん、ドロップアウトではなく、企業にヘッドハンティングされたケースや、志望企業に転職したケースもあるので、一概に「良い」「悪い」とは言えないが、最後までやり遂げる人が少ないのは事実。やはり地域外から来て活動すると、孤独や気苦労を感じることが多い。地域に1人で配属されるケースはなおさらだろう。そんな時、**周りに相談できる仲間がいるといないとでは、大きな差がある**。辛い時期も、仲間がそばにいて感じることができるだけで、踏ん張ることができる。事実、さめきの輪の集いは、1人で活動されている方からとても支持されている。また、さめきの輪の集いが始まって以降に着任した地域おこし協力隊の離職率は、格段に下がっている。**その陰には、隊員同士で励まし合ったり助け合ったりする「踏ん張り力」が間違いなく作用している**。



接着剤②さぬきの輪 WEB&TIMES

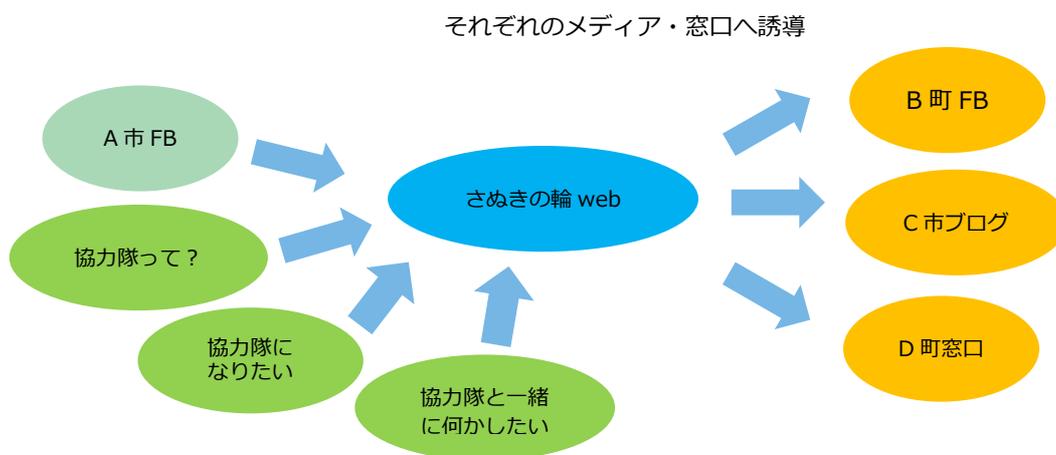
接着剂的役割の2つ目は、**メディアによる協力隊情報の発信**。地域おこし協力隊のことを広く知っていただくために、重要な取り組み。香川県は Facebook や Twitter といった SNS はもちろん、「**さぬきの輪 WEB**」(sanukinowa.com) という情報ポータルサイトや「**さぬきの輪 TIMES**」というフリーペーパーを運用している。WEB と TIMES、それぞれが持つ機能について紹介させていただく。

情報の窓口一元化へ

「地域おこし協力隊の事を知りたいければ、どこを見れば良いですか？」

2年前、香川県の各地域おこし協力隊はそれぞれで FACEBOOK やブログなどの情報媒体は持っていたが、それらが連携していたり、包括的な情報を発信しているものは無かった。地域おこし協力隊に興味のある人は、わざわざ各市町の Facebook に情報を取りにいくなしか方法がない状況。ウェブ上でそうした情報を1つにまとめたのがさぬきの輪 WEB。「**地域おこし協力隊に興味がある人は、まずこちらをご覧ください**」という窓口の役割を持っている。各市町の協力隊が、日頃 SNS 等を通じて発信している情報を集約することに加え、地域おこし協力隊の名簿や募集情報なども掲載した。**どんな人達が、どんな想いで、どんなことをしていて、どんな募集があるのかななどを、1つのサイトで見られるように心がけた。**

仕組みは非常にシンプルで、各地域おこし協力隊が日頃公開している SNS やブログの記事をさぬきの輪 WEB に集めるといふもの。県全体として地域おこし協力隊や町おこしに興味がある人のアクセスを集めて、さらに興味がある方は各自治体のメディアに誘導するのが大きな目的である。



情報を一元化したことによる反響は大きかった。地域おこし協力隊に興味がある方からの問い合わせを受けたり、Facebook ページにたくさんのいいね！をしていただけるようになったりと、地域おこし協

力隊を認識している人を着実に増やすことができた。各市町だけの集客力ではなく、それぞれの集客力を併せて規模感を出せたことによる効果だろう。**1つ1つのメディアの集客力が、仮に小さかったとしても、それぞれが集まって発信することでより大きな力を発揮することができる。**さぬきの輪 WEB の運用を通じて、連携することの重要性を再認識することができた。

情報をストックしておくための「さぬきの輪 TIMES」

WEB や SNS は、インターネットを介してたくさんの人に最新の情報を届けることができるが、常にたくさんの情報が飛び交い、なかなか情報をストックしておくことはできない。しかし、**地域おこし協力隊はそれぞれに素晴らしい活動をしており、何とかそうした情報をしっかり残しておきたい。**そうした思いからスタートしたのが「さぬきの輪 TIMES」というフリーペーパー。

さぬきの輪 TIMES は、県として伝えたいメッセージを掲載する特集ページと、それぞれの隊員の活動の様子を伝える隊員ページとに分かれている。各隊員のページはそれぞれの地域おこし協力隊が名刺代わりに周りの人に配ってもらえるよう、活動内容はもちろん、**これまでの背景や活動の動機、思い描いている未来などをまとめ、その隊員の人となりを伝えられる内容を心がけている。**また、香川県内のどの地域に、地域おこし協力隊が導入されているかが分かる分布図も必ず記載するようにしている。地域おこし協力隊の活動地域が見える化することで、地域おこし協力隊をより身近に感じてもらいたいためだ。

元々は情報のストックのために制作した TIMES だが、その反響の大きさに驚かされた。配布した先から「見ました!」「良かったよ!」など、かなりの反応があったのだ。TIMES を通じて地域おこし協力隊に興味を持ち、わざわざ県庁に会いに来てくれる人もいたほど。こうした TIMES への反応は、**インターネットによる情報発信が主流になりつつある現代で、紙媒体の持つメディア性を改めて感じる経験となった。**



半年に一度発刊。2年間で4冊制作した。

地域おこし協力隊をブランディングするためのメディア

さぬきの輪 WEB とさぬきの輪 TIMES。この2つのメディアには、それぞれの役割と併せて、1つの共通テーマを持たせている。それは「**地域おこし協力隊を輝かせるメディア**」だということ。地域で様々な活動に取り組む地域おこし協力隊の情報をしっかりと発信し、県民にきちんと認識してもらおう。そうした情報発信を通じて、**各地域おこし協力隊がより生き活きと活動できる**というのが共通のテーマであり、一番の目的である。

心がけた点は2つ。1つ目は、シンプルに「**カッコいい**」と思ってもらえる**メディア**にすること。「地域おこし協力隊って、なんだかカッコいいなあ」と、見る人に感じていただくためには、しっかりとデザインにまで工夫を凝らしたものを作る必要があった。そうしたデザインにすることで、隊員自身が自分たちの取り組みについて、**誇りや自信を抱く自己肯定感も醸成することができる**。そんな想いもあって、それぞれのメディアのデザインについては、専門家のアドバイスもいただきながらこだわって作りこんでいった。

2つ目は、地域おこし協力隊それぞれの**想いや背景を伝えるメディア**にすること。単に活動内容をお知らせするのではなく、「どんな想いを持っているのか?」「何を目指しているのか?」ということを丁寧に伝えるようにした。それによって顕在化したかったのが、**地域おこし協力隊への共感者**。地域おこし協力隊の活動は、その根っこにある想いの部分に共感してくれる人が、いるといたないとではその拡がりや力強さに大きな差が出る。想いに共感してくれる仲間が1人いるだけで、一気に活動に広がりや粘り強さが生まれ、最終的には素敵な取り組みにまで昇華させることができる。**背景や想いをきちんと伝え続ける**。地域おこし協力隊の想いに共感してくれる仲間を顕在化させるためには、そうした発信が必要と考えている。

行政と隊員の垣根を無くしたい

行政職員と地域おこし協力隊の連携を図るため、両者を集めた「さぬきの輪 座談会」を実施した。行政職員と地域おこし協力隊の連携の重要性は、ここで改めて述べるまでもない。しかし、香川県内の各自治体から状況を伺うと、まだまだお互いの連携体制は十分でないと感じている自治体が多いことが分かった。普段から連絡を取り合う関係にある両者だが、日頃の業務に追われる中で、コミュニケーションを密に取ることが、意外にもできなくなっていた。デスクが役場の外にあり、日頃、顔を合わせる機会が少ない協力隊の場合は尚更である。

そうした状況を打破するために行った座談会。毎回、各自治体から職員、協力隊に多数参加している。平成 29 年 9 月に実施した座談会は合計 30 人以上が参加し、さぬきの輪の集いを含めても、これまでで最大人数となった。座談会の内容自体はいつもシンプルにすることを心がけている。5、6 人で同じテーブルに座って、お互いに話をする意見交換タイムがメイン。内容はシンプルだが、**空間づくりにはこだわっている**。毎回カフェの一室を借りて、音楽をかけ、お茶を飲みながら**リラックスした気持ちで話せる場に仕立てている**。議論することや情報交換が真の目的ではなく、**お互いの関係性構築が最大の目的のため**、堅苦しい会議のような雰囲気ではなく、あえてラフに、自然体な雰囲気の中で話し合う。こうした雰囲気づくりが、日頃は見えないお互いの人間性や素の部分を引き出す。**お互いを理解し合う事で、より強固な人間関係が作れる**。シンプルな会だが、目的意識をしっかりと持って実施した。

さぬきの輪座談会データ (2015/9~2018/2 延べ)

実施回数	協力隊参加者	行政職員参加者
2 回	31 人	20 人

行政職員同士のつながりも

地域おこし協力隊と行政職員の関係作りが座談会の目的だったが、**行政職員同士がつながることの重要性も感じる機会となった**。それを感じた場面は、座談会の休憩中。座談会中に話した内容について、「詳しく聞かせてください」と職員同士で情報交換し始めた時。ほとんどの職員にとって、地域おこし協力隊の運用は未経験。経験がある場合でも、少ないノウハウの中で進めていくケースがほとんどだろう。そうした中で、近隣の市町がどのように地域おこし協力隊と関わっているかを知ることがとても重要。地域おこし協力隊が横のネットワークを通じて、地域づくりにおける知識・経験を共有するのと同様に、**行政職員同士も横のネットワークを活かして、地域おこし協力隊事業のさらなる充実を図ることができる機会となった**。今回は副産物的に、その重要性に気が付けた行政職員同士のネットワーク。今後はこうしたつながりを醸成するための取り組みの必要性も感じる。

人間関係の入り口として

「本音が聞けた」「思っているだけでは伝わらないという事が理解できた」

座談会後にとったアンケートに記載された声。普段から共に事業を進めていく行政職員と地域おこし協力隊。報告・連絡・相談は日頃から密に行われているはずの両者も、きちっと向き合って本音で話す機会をつくるのはやはり難しい。いや、日頃から近くにいる関係性だからこそ難しいのかもしれない。そこに座談会の価値を感じる。コーディネーターの立場では、両者の本質的な会話を創り出すことはできない。しかし、その入口をつくる事はできると考えている。**さめきの輪座談会が、両者の良好な関係性のきっかけになってくれていたら嬉しく思う。**



補強剤①さめきの輪 TERACOYA

地域で仕事する上で必要なスキルを磨く

地域おこし協力隊の知識やスキルを補う補強剂的事業の1つ目は、**さめきの輪 TERACOYA**。「もっと地域おこしに関する勉強の機会が欲しい」TERACOYA は地域おこし協力隊からのこうしたリクエストによって実現した事業である。地域おこし協力隊と一言に言っても、持っているバックグラウンドやスキルは人それぞれ違う。全員が地域おこしに関する知識を持っているわけではなく、地域で仕事するのが初めてという人もいる。そうした部分を補うため、**地域で仕事をする上で必要最低限なスキル・知識を身につけるプログラムが TERACOYA** である。

さめきの輪 TERACOYA データ (2015/9~2018/2 延べ)

実施回数	協力隊参加者	行政職員参加者	招請した講師
4回	48人	4人	プロコーチ、協力隊 OBOG など

試験的に実施した「コミュニケーションスキル」

さぬきの輪の集いが現場での視察や意見交換がメインの取り組みであるのに対し、TERACOYA は地域おこしに必要な知識・スキル取得のための座学・演習がメインの取り組み。平成 28 年度に試験的に実施した TERACOYA の主なテーマは、**コミュニケーションスキル**で「ファシリテーション」「プレゼンテーション」「コミュニケーション」と、3回に分けて実施した。それぞれプロコーチをお呼びして知識・スキルを体系的に学ぶと同時に、すぐに演習をして身体に覚えさせるというプログラム。

コミュニケーションスキルは、地域おこし協力隊に最も必要なスキルの1つ。どんな仕事であれコミュニケーションスキルは大事なのだが、地域の中で、**ある程度リーダーシップやファシリテーターとしての役割を求められる地域おこし協力隊にとって、普通の職種よりも重要度が増すと考えている**。地域外から来た人間が地域に馴染みながら仕事をするというのは、持っているコミュニケーションスキルを試されているようなもの。「明日から実践出来るスキルを学べて良かった」「日頃感じているモヤモヤが解消できた」地域おこし協力隊は、日頃から地域の方と細かなコミュニケーションを取りながら活動している。相手の言葉に耳を傾けたり、自分の想いを伝えたり、日頃から無意識に行っていることではあるが、改めて体系的に学ぶことは非常に有意義だった。コミュニケーションについて、自分がつまづくポイントはどこか？上手くコミュニケーションを取れた時は、何がポイントだったのか？それらを体系的に学ぶことで、自分の中に浸透させることができたのではないだろうか。

隊員のニーズに合わせたきめ細かい学びの場を

TERACOYA は、もっと多様な学びがある場にしていきたいと考えている。地域おこし協力隊はそれぞれ活動内容も違うし、任期後の目標も違う。当然、学びたいと感じている分野もバラバラだろう。また、着任1年目と3年目でも必要な知識やスキルは異なる。**そうした多様な学びニーズに合わせたプログラムを作り、豊かな学びを通して、地域も隊員も輝けるような仕組みを整えていきたい**。



補強剤②さぬきの輪そろばん教室



行政予算をみんなで考える教室

補強剂的事業の2つ目は、**さぬきの輪そろばん教室**。地域おこし協力隊に向けた行政予算の講座。行政予算の性質から予算の組み方、予算のスケジュール、地域おこし協力隊の活動費の性質、活動費の使い方などなど、**お金にまつわる話を、地域おこし協力隊みんなで勉強する機会である**。前後半の2部制で、前半は行政予算に関する講義、後半は地域おこし協力隊同士の情報交換会とした。前半の講師は日頃から行政予算を扱っている香川県の職員にご担当いただいた。講義の内容は次の通りである。

1 行政予算を理解しよう

1-1 行政予算の性質

1-2 行政予算のスケジュール

1-3 行政予算の使い方

2 地域おこし協力隊の活動費を理解しよう

2-1 特別交付税の流れ

2-2 活動費はどんなことに使えるのか？

行政予算と特別交付税、それぞれの基本的内容を説明するもの。行政予算については、性質とスケジュールを中心にご解説いただいた。行政予算は公金故にどんなものに使えてどんなものに使えないのか。また、いつから次年度の予算を組み始めていつ決まるのか。など、**民間感覚ではどうしても分かりづらく、地域おこし協力隊がつまずきやすい点をまとめて伝えた**。特別交付税については、国の意図やお金の流れなどを中心に解説し、地方自治体は、それとどう向き合っているのかという点を丁寧に伝えることを心がけた。

基礎知識の共有がムダな時間を減らす

予算と特別交付税、2つとも行政職員にとっては当たり前の知識かもしれないが、民間人にとってはどうしても分かりづらい分野。そして、地域おこし協力隊と行政担当者との間で起きる、予算についてもめ事のほとんどが、こうした**基礎知識の共有不足により起こるもの**。地域おこし協力隊の提案に対し、行政担当者は「そんなことには使えません。当たり前です。」と、何故使えないのか？という前提知識を省略してしまうし、地域おこし協力隊も自ら勉強もせずに「行政担当者から頭ごなしに否定された。」と誤解してしまう。**基本的な知識の共通認識があれば、そもそもむちゃな提案が生まれることもないし、余計なもめ事から時間と労力を奪われずにすむ**。前半の講義はこうしたムダを無くするための機能がある。

連携体制から生まれる新たな発想

後半は地域おこし協力隊同士の情報交換会を実施した。これも前後半に分けて、今年度と来年度の予算について、それぞれ情報交換した。

前半は、それぞれの市町で持ち寄った予算書をもとに、今年度予算がどんな内訳で積み上がっているかを共有する時間とした。どんなものにいくら使っているのか。いくら使う予定なのか。**隣の市町の予算の組み方を知る事で、自分の市町の予算の効果的な組み方を考えるきっかけ**をつくることを心がけた。

何がしたいのか？それはどうやったら実現できるのか？という順序

後半は来年度の予算について議論した。来年度の予算を考える際、最も重要なのは思考の順序。一番初めに考えるべきは「何がしたいのか？（何をすべきか？）」ということ。そこから「それにはどんなモノ・コトが必要か？」を考える。ここまで考えて初めて「何にいくら使うか？」という点を議論できるようになる。通常、この順序は至極当たり前の順序であるが、こと行政予算に関していえば、**この順序が逆になってしまいがちだ**。「こんな補助金があるからこれをやろう」「予算が余っているからあれをやろう」これに近いニュアンスの事業をいくつも見た事がある。『**「何のために何がしたいのか（すべきなのか）」先ずはこれを徹底的に考えましょう**』正しい順序を身につけるために、そろばん教室内で県の担当者が何度も発した言葉。「何のために何がしたい（すべき）」これを考える際、次の1年間だけを考えれば良いというわけではない。その後続く**地域の未来、自身の未来を見据えて、どんな予算を計上すべきかを考える必要がある**。すなわち、**来年度の予算を考えることは、次の1年についてだけ考えるのではなく、その先の地域の未来、自身の未来を考えると同じ**。後半の意見交換では、こうした意識を持っていただくきっかけになったと考えている。

一緒に予算を考えるという“横の連携”

地域おこし協力隊が行政区域の枠を越えて予算を考えることは、とても大切だと考えている。地域おこし協力隊同士の予算を伴う連携の可能性が生まれるからだ。地域間連携が重要であることは言わずもがなだが、現状、地域の枠を越えて予算を伴う連携が出来ている所は多くない。地域おこし協力隊同士で集まって情報交換をしたり、オンライン上でPR 協力をしたりすることはあっても、それ以上の連携、例えば、事業を一緒に行う等の連携はなかなか見られない。予算を伴わない連携は行われているものの、予算を伴う連携はあまり行われていないと言い換えることもできる。これは、地域おこし協力隊が予算を計上する際、**横の連携を意識できる機会が少ないことが原因**だと考えている。次年度の予算を考える際、地域おこし協力隊は自分の地域単独でできることから発想しがちである。そもそも隣の地域おこし協力隊が、どんな想いで何をしているか知らないケースもあれば、自分の活動に近い事業をしていることは知っていても、「一緒に予算を計上する」という発想に至らないケースもある。自分たちの予算計画を持ち寄って、想いを語る。地域おこしを考えるうえで、既存の行政区域にとらわれない発想

と、複数人が関わることによるスケール感は大切。これらを最大限活かすためにも、**地域おこし協力隊**同士で次年度の計画を考え、**予算の伴う連携の可能性を探る作業は非常に意味のあること**だと考えている。



第三章 香川県地域おこし協力隊本気宣言



本気宣言の5つの柱

平成28年8月、香川県は「地域おこし協力隊本気宣言」をさぬきの輪WEB上で公開した。これは、地域おこし協力隊コーディネーターの活動を初めとする香川県の取り組みをまとめて紹介することで、**受け入れ体制をPRし、適切な人材を確保するためのもの**。宣言には5つの柱がある。

本気その1：導入目的明確化サポート

「**どうして地域おこし協力隊を導入するのか？**」ということを事前に考えるきっかけをつくる取り組み。行政職員と地域住民とコーディネーターで地域の課題を議論したり、地域おこし協力隊を受け入れるための体制等を検討する機会を設けている。

本気その2：協力隊ネットワークで支え合う

月に一度地域おこし協力隊同士で意見交換を行う「さぬきの輪の集い」や地域おこし協力隊専用メッセージグループなど、地域おこし協力隊同士が繋がって、**情報交換したり、支え合ったり出来る仕組み**を構築している。

本気その3：協力隊×行政連携体制サポート

行政職員と地域おこし協力隊の連携を強化するために、それぞれに対する独自研修や、ざっくばらんに意見交換ができるような座談会を実施。日頃から地域の課題解決に向かって2人3脚で取り組む必要がある両者が、さらに**有用な連携体制を構築できるような取り組み**。

本気その4：定住しやすい体制づくり

香川県は移住サイト「かがわ暮らし」や県内の空き家情報が一目で分かる「かがわ住まいネット」、サポートスタッフによるマッチングサービスが充実の「jobナビかがわ」など、**地域おこし協力隊の定住を応援する体制**を整えている。

本気その5：挑戦しやすい体制づくり

香川県は移住者向けの起業支援補助金や創業支援センターでの相談対応など、**創業・起業の準備段階から起業後のフォローまでをサポートする体制**を整えている。また、「FAAVO香川」のオフィシャルパートナーとして、クラウドファンディングを活用した地域活性化事業を積極的に応援している。

以上が本気宣言の5つの柱。地域おこし協力隊コーディネーターが日頃から取り組んできた事業と、既存の香川県の事業を組み合わせで分かりやすくまとめた。1～3が地域おこし協力隊コーディネーターの取り組み、4、5が既に香川県の各セクションで取り組まれていたものだ。地域おこし協力隊コーディネーター

ターの事業と、地域おこし協力隊と親和性の高い県事業とを組み合わせることで、地域おこしに取り組むのに最適な環境であることをPRした。

私たちの本気宣言

本気宣言を公開すると同時に「私たちの本気宣言」という企画もスタートさせた。これは地域おこし協力隊、行政職員、地域住民の3者にインタビューし、それぞれが**どんな想いで地域おこしに取り組んでいるか**、また、**どんな想いで地域おこし協力隊と接しているか**を記事にしたもの。地域おこし協力隊に関わる皆さんの想いが見える化し、共感者や応援者を増やすのが狙い。これまでに17人の皆さんにご協力いただき、それぞれの想いを掲載することができた。第三者に想いを伝えるという当初の狙いの他に、地域おこし協力隊、行政職員、地域住民同士で想いを確認し合う良い機会になったとも感じている。日頃から活動を共にする3者だが、なかなか面と向かってお互いの想いを共有する機会は多くない。インタビュー記事を通じて「そんな風に思っていてくれたんですね」と涙ぐむ隊員もいたほど。**想いの共感や確認によって、取り組みや活動が加速し、強固なものになる**。「私たちの本気宣言」はそうしたことを改めて感じる企画だった。

宣言することの意味

本気宣言には、香川県の受け入れ体制をPRすることにより優秀な人材を確保するという表向きの目的の他に、もう1つの目的があった。それは県内の地域おこし協力隊に関わる人たちに向けた、**地域おこし協力隊コーディネーターのPR**。特に地域おこし協力隊の受け入れに深く関わる行政職員に向けている。地域おこし協力隊が生き活きと活動しながら地域の課題を解決していくためには、行政職員を中心にしっかりと受け入れ準備を進めることが非常に大切。導入目的を明確にすることや地域住民への説明など、丁寧にやるべき事柄は多い。しかし、そうしたノウハウが少ない地域、特に地域おこし協力隊を初めて導入する地域などは、丁寧にやるべきことがおざなりになってしまうことがある。その結果、地域おこし協力隊が導入されてから大変な思いをする自治体も少なくない。そんな事態を避けるためにも、地域おこし協力隊コーディネーターができるサポートをまとめて「本気宣言」とした。地域おこし協力隊の導入を検討している行政職員に「こうしたサポートがあれば利用したい」あるいは「地域おこし協力隊を受け入れるのには、ここまでする必要があるのか」と感じてもらうための宣言でもあった。反響もあった。いくつかの自治体から「地域おこし協力隊の導入を検討しているので、相談に乗って欲しい」と声がかかり、実際の準備をお手伝いさせていただくこともできたし、県外からも取り組み内容を教えて欲しいと呼んでいただけることもあった。**地域おこし協力隊コーディネーターという聞き慣れない立場の人間に、いったい何ができるのか？**本気宣言は、これを伝えるための手段としての機能も小さくはなかった。



自由だからこそ、事前の準備が大切

地域おこし協力隊は非常に自由度が高い制度。地域によって活動内容や雇用体系、所属団体など同じ隊員はいないといっても過言ではない。自由だからこそ、様々な角度から地域課題の解決や地域の活力向上に取り組むことができる。一方で、一定の条件を満たせば、**どんな運用体制であれ、地域おこし協力隊を導入できる**と言い換えることもできる。決してあってはいけないが、十分な準備や目的や無くても導入することができるというもの事実。そして、残念なことに、「そうだったのでは？」と疑わざるを得ない事例も、全国ではたくさんある。

制約がない自由な制度だからこそ、**導入する地域は自らで課題や目的をきちんと整理して受け入れ準備を進める必要がある**。ミッション型？フリーミッション型？席は役所に？それとも地域コミュニティに？3年後は協力隊とどうつき合う？...考えることはたくさん。しかし、**どれも「何故そうするのか？」をしっかりと考えて整理し、共有することが必要だ**。地域おこし協力隊を導入すると、事前に想定していたこと以外のことが起こるので、計画は変更せざるを得ない。つまり「計画できないもの」なのかもしれない。それでも事前に考えぬく。行政職員と地域住民でそれを体験・共有する。こうした**事前の準備をきちんとすることが、地域おこし協力隊制度の最も大切な要素の1つ**。このプロセスをサポートしたいという思いから「導入目的明確化サポート」をスタートさせた。

導入目的明確化サポートは、行政職員、地域住民、コーディネーターの三者で行う地域おこし協力隊導入に向けたアクション。大きく分けて次の7つの段階に分かれる。

- 1 地域おこし協力隊についての情報共有
- 2 地域課題の洗い出し
- 3 地域課題の仕分け
- 4 地域課題の選定
- 5 ビジョン設定
- 6 ミッション設定
- 7 地域・行政・隊員で共有

内容は地域によって多少変更することがあるが、基本的にはこの7段階を丁寧に行っていく。それぞれの段階の詳細について、本アクションを最初に実施したまんのう町を例に説明する。

応募人数 0 人からスタートしたまんのう町

まんのう町は香川県の西部に位置する人口約 18,000 人の小さな町。満濃池やヒマワリの名所として知られているが、他地域と同様、高齢化や人口減少が課題となっている。そうした現状に歯止めをかけようと、平成 27 年度から地域おこし協力隊の導入に乗り出していた。しかし、結果は実らず。1 名の応募すらなかったという。こうした結果を受けて、翌年平成 28 年度は、我々コーディネーターと共に、もう一度 1 から地域おこし協力隊受け入れに向き合うことになった。ここからまんのう町の導入目的明確化サポートがスタートする。

まずは「地域おこし協力隊とは？」を伝える

初めに行ったのは「1:地域おこし協力隊についての情報共有」。行政職員と地域住民に「地域おこし協力隊とはそもそも何か？」ということを説明した。地域おこし協力隊という言葉は知っていても、制度の特徴や様々な運用事例まで認識していない行政職員や地域住民は多い。特に地域おこし協力隊を、初めて導入する自治体であれば尚更。まずは前提知識の共有からスタートした。

まんのう町の場合、民間と連携しながら地域おこし協力隊に活動していただくために、地元の農業法人とケーブルテレビと共に受け入れ準備を進めていた。私は町職員と共に、それぞれに足を運び、現場を確認すると同時に、地域おこし協力隊の意義や狙い、香川県をはじめとする全国の地域おこし協力隊の現状、課題、参考になる運用事例など、地域おこし協力隊に関する基礎的な知識を共有させていただいた。このとき、日頃から県内の地域おこし協力隊及び行政職員、地域住民の皆さまと情報交換していたことが非常に役立った。実際に香川県内で地域おこし協力隊を運用している地域が、どんな効果や課題を感じているかを、まんのう町の皆さまに還元することができた。

また、説明の際に活用したのが「～さぬきの輪的～地域おこし協力隊導入のための心得」。こちらも香川県内で地域おこし協力隊に関わる皆さまからいただいたアイデアを基に制作したもの。協力隊が抱える課題や得意なこと、導入目的を共有することの重要性など、7 つの心得として簡単にまとめた。こうした資料については、今後も様々な情報を取り入れながら、さらにブラッシュアップさせていきたい。

地域おこし協力隊導入のための心得

～地域おこし協力隊を活用して地域がさらに元気になるために～

その①制度を知る

概要（出典：地域おこし協力隊HP: <http://www.jfu-join.jp/chikiokoshi/>）
人口減少や高齢化等の進行が著しい地方において、地域外の人材を積極的に受け入れ、地域振興活動を行ってもらい、その定住・定着を図る事で、意欲ある都市住民のニーズに応えながら、地域力の維持・強化を図っていく事を目的とした制度

全国の地域おこし協力隊：約2,600名（平成27年度現在）

香川県の地域おこし協力隊：第3市4町18名（平成28年4月1日現在）

その②課題を知る

「誰に相談したらいいの？」（相談役の不在）
相談する相手がおらず、隊員が孤立と不安を感じながら活動するケース▶メンター（相談役）の設置

ii 「コミュニケーションが上手く取れない」（意思疎通の壁）
職員・住民とのコミュニケーションで悩むケース▶密なコミュニケーションの仕組みが必要

iii 「任職後が不安」（将来に対する不安）
「楽しい」だけではいつまでも続かないケース▶3年間隔う責任と将来を一緒に考える協力体制が必要

その③本質を知る

地域おこし協力隊は、地域課題解決のためのツール（手段）です。つまり、導入するの目的ではなく、**地域課題の解決が目的**です！

「何のために、何をしてもらうのか？」

課題	ツール（手段）
住民の減少	定着と滞在
人口減少	移住コンシェルジュ
若い世代減	移住促進
????	地域おこし協力隊

地域・行政・隊員、全員が共有する必要があります！

その④協力隊が得意なことを知る

ココを事前に決めるのが重要！

- 若者目線** 柔軟な発想、ITの活用など
- ふそ者目線** 前例にとらわれず、新鮮な目線で地域を捉える
- 島民目線** 協力隊ネットワークを活かして広い視野で地域を捉える

その⑤目的を明確化し、共有する

課題の洗い出し
課題の仕分け
課題（目的）選定
ビジョン設定
ミッション設定
地域・行政・隊員で共有

「何のために？」
「何%目標ですか？」
「何をやるのか？」

優先順位
この課題に挑戦
自分達で出来る
自分達で出来ない

その⑥受入態勢を整える

くらし観
住居 | 生活環境 | 通勤環境 | 住民の受入態勢 | 住民との交流の機会

しごと観
雇用形態 | 勤務場所 | 副業 | 給与 | 備品（PC、公用車等） | 活動範囲 | 職員理解
しほろんそら（期間・連絡・相談）体制 | 意思決定体制 | 任期後イメージ | 定住サポート
研修・スキルアップの機会

その⑦心構え

・3者の思いを1つにする
協力隊と地域の「密接役」
課題解決に向けた
「きの細かいサポート」

・協力隊に「やってもらう」のではなく、「一緒にやる」
・協力隊は便利屋、スーパーマンではない。「地域の仲間」

・強りよがり、自己満足では地域は起こせない
・地域の意思を尊重する
・「やりたい事」と「地域の想い」の機会をカタチに

さぬきの輪的 地域おこし協力隊導入のための心得
平成28年8月 第1版 製作
香川県産業部地域活力推進課
〒760-8570 香川県高松市番町4丁目1番10号
TEL:087-832-3105 FAX:087-831-1165
MAIL:chiki@pref.kagawa.lg.jp

課題を出して選定

次に行ったのは**地域課題の2：洗い出し、3：仕分け、4：選定**。洗い出し作業では、地域の課題をできるだけ挙げることを心がけた。課題の大きい小さいなど、枠にとらわれずに、とにかく思いつく課題を挙げていただいた。こうした作業を経ること自体が、地域おこし協力隊が持つ意義の一つだと考えている。日常の中で、地域の現状を冷静に見つめ返す機会は多くない。まして、行政職員と地域住民が一緒に考えるという機会は、ほとんどないだろう。地域おこし協力隊の導入準備は、そのきっかけになりうる。その意味においても、**地域おこし協力隊に取り組んでもらいたいことを、最初から特定せずに、様々な地域課題に発想を巡らせることは重要だと考えている。**

「ひまわり農家不足」の原因の正体

地域住民とまんのう町職員、そこに私と県職員が加わって、「自分たちの周りで起きている課題」についてざっくばらんに話をした。話をしながら、**会話の中にあるキーワードをフセンに書きとめていき、課題に見える化・整理していった。**

農業法人の皆さまと話した内容がとても印象に残っているので紹介したい。地域おこし協力隊を通じて、地域課題の本質に近づけたのではないかと感じる事例だった。みなさんに「地域でお困りのことはありますか？」と質問した時、真っ先に返ってきたのは「ひまわり農家が足らん」だった。まんのう町の顔とも言えるひまわりの管理・運営を行ってきた農業法人だ。ひまわりを観光資源として活用してい

るだけでなく、種から取った油を商品化し販売も行ってきた。そうした事業の担い手が年々減り続け、今では作業のほとんどを、1人で行っているという。そうした現状から、とにかくひまわりの面倒を見ることのできる人材が必要という発想に至っていた。「地域おこし協力隊を活用して、ひまわり農家を1人増やしたい」**ここで課題を「ひまわり農家の不足」と決めつけずに、さらに深堀していった。**「どうしてひまわり農家が減ってしまったのか?」「昔はどのように行われてきたのか?」などなど、課題の根源は何かを探っていく。そして、課題に対する行動が「ひまわり農家を増やすこと」なのか、みんなと一緒に考えていった。

しばらくして地域住民の1人が昔を思い出すように「昔は率先して地域のみんを巻き込むリーダーみたいな人がいたもんだ。」「その人のためならって、農家もそうでない人も手伝ってくれたんよ。」と、ポロッと話してくれた。かつては地域のまとめ役がいて、地域間の結束も強かったという。そうしたまとめ役が減ってきたことに伴って、住民同士のつながりも次第に薄くなっていった。つながりが薄くなるとひまわりの管理を農家だけでやるようになる。農家の数も年々減ってきているので、次第に農家だけの管理も苦しくなる。こうしてひまわりの世話をするのは、1人だけになってしまった。**「農家不足」の背景に、「リーダー役不在」が浮かび上がった。**

ポジティブな妄想から見えるビジョンとミッション

「リーダー役不在」を本質的な課題に位置づけた後は、**地域の理想の状態(5:ビジョン設定)をイメージする作業を行った。**「3年後、地域おこし協力隊が地域のリーダー役として機能した時、地域はどんな状態になるのか」を3者でポジティブに妄想する作業。**そうした妄想の中から、地域おこし協力隊の役割(6:ミッション設定)を徐々に明確にしていく。**「リーダーを中心に、昔みたいに地域がまとまってくれたらええなあ」「町とも連携しながら、色んな人が協力し合える地域が理想やな」「農業ももっと儲かるようにせんといけん。儲かったら人も来るし、ひまわりも続けられる」そうした会話から、地域住民同士が協力する力を【共働力】、経済的にもしっかりと自立できる農業の力を【農業力】と名付け、それら2つの力が備わっている状態が理想的だと**3者で共有することができた。**ここから地域おこし協力隊の役割をさらに明確にしていく。**理想の状態に近づくために、地域住民は何をすべきなのか?行政職員は?そして、地域おこし協力隊は何をすべきなのか?**を考えていった。

地域おこし協力隊に農家のまとめ役を

「不在になったリーダー役を、地域おこし協力隊に担ってもらえないか。」リーダー役不在に気づいてから、この発想に至るまで、ほとんど時間はかからなかった。地域のみなさんは、何か変わる契機を、誰かがみんなをまとめてくれることを待っている様子だった。地域おこし協力隊はそうしたポストに適任。外から来た人が地域に新しい風を吹かせながら、地域の絆を取り戻していく。**そうしたきっかけを、地域おこし協力隊に作ってもらいたいと考えるようになっていった。**

農業の輪の中心に

農家が減少している背景に「経済力の低下」があることも明らか。「ひまわりは割に合わん」ひまわり油や搾りカスを販売しているとはいえ、十分な収入が得られるわけではなかった。経済力が低下した理由は様々あるが、その1つにあるのが「役不足」農家は野菜を作ることで手一杯になり、ブランディングやPR、販路拡大など、売るための作業に手が回らない状態。作る役はいても、伝える役、売る役が不足していた。この役割も地域おこし協力隊のミッションの1つとなった。前述したリーダー役を中心に、伝える役、売る役も担うことで、経済循環を生み出していく。**農業で地域が元気になっていく輪の中心に、地域おこし協力隊がいるイメージを膨らませていった。**

ビジョンを共有できた意義

もちろん、最初からリーダー役を担ってもらおうというわけではない。地域に馴染むこと、農業の知識・経験を積むこと、そうした土台があって初めて形にできる役割だと考えている。したがって、当面は農作業などを地道に行ってもらおう。しかし、その先に見据える姿は農家のそれとは全く異なる。**広い視点で地域を捉え、人や農業の資源を有機的につなげることでできる人材。**地域おこし協力隊としての2年目、3年目はそうした動きの割合を大きくしていこうと話合った。

地域住民と行政職員でこうした地域おこし協力隊のビジョンを共有したことは、非常に大きな意義があると考えている。共有のビジョンがあれば、それに向かってそれぞれの役割を全うすることができる。それぞれが地域おこし協力隊との**3年後の関わり方をイメージすることができる。**もちろん、ビジョン通りに進むことばかりではない。地域おこし協力隊本人の意向も汲みながら、時には修正しながら進めることも必要。しかし、事前にこうした未来像を描くこと、そしてそれを共有することは、地域にとって、とても意味のある取り組みだったと感じている。「農家が欲しい」から始まった想いが、「農業の輪の中心になれる人材が欲しい」にまで広がった。そして、その意味を当事者同士で確認し合い、そのために自分たちのすべきことを見つめ直した。地域おこし協力隊をきっかけに、**地域課題にしっかりと向き合うことができたのではないだろうか。**

未来の地域おこし協力隊に共有

地域の理想像やそれに伴う地域おこし協力隊のミッションが描けたら、次にやることは、それらをきちんと**共有すること**である。ポイントは**地域おこし協力隊、行政職員、地域住民の3者で共有すること。****未来の地域おこし協力隊にもきちんと共有する仕組みが重要。**地域のビジョンと、そのための地域おこし協力隊のミッションをしっかりと共有し、共感していただけた方に地域おこし協力隊になっていただく。そうした流れを作るために、各種メディアや広報媒体を使って、共有・共感を生み出す取り組みを行った。

募集要項は共感の入り口

まずは、話し合ったビジョン・ミッションを基に募集要項を作成する所から始まった。募集要項に地域おこし協力隊に期待する役割をきちんと明記するとともに、地域が目指す「【農業力】と【共働力】で元気な地域に」というコピーを盛り込んだ。些細なことだが、これができている地域はそれほど多くない。「どんな地域を目指して、地域おこし協力隊に何を期待しているのか？」が読み取れないことが多い。**未来の地域おこし協力隊には地域のビジョンやミッションに共感していただける方に応募していただきたい。**その入り口となる募集要項は、きちんと整理することを心がけた。

「ここまで準備しています」で差別化を

募集要項を整えた後は、各種メディアを使ったPRを行った。JOINへの掲載はもちろん、さぬきの輪WEB、地域系の求人メディアに掲載すると共に、有名ブロガーにPR記事を作成していただくなどした。こうしたPRの際、特に心がけたのは**他地域との差別化**だ。全国各地で地域おこし協力隊の募集が実施されている中、どうやってまんのう町の募集に興味を持ってもらうか、差別化が必要だった。

活動内容や雇用条件、3年後の考え方など、各地で思い思いのポイントをPRしていた。そんな中、まんのう町はどこに焦点を充てたか？それは「**事前準備の質**」だった。この頃、地域おこし協力隊の中には「失敗事例」と言われてしまう自治体も出始め、「地域おこし協力隊になりたい人は、しっかりと自治体を見極めるべき。」という風潮が表れ始めていた。実際、私自身も、様々な地域おこし協力隊の事例を見る中で、地域おこし協力隊が地域で上手くいくかどうかは、事前準備の善し悪しに強く影響を受けると感じるようになっていた。そして、この「事前準備」は、「関わる人の意識」が大きく影響している。つまり、**地域おこし協力隊は、「関わる人の意識」に大きく影響を受ける。**そして我々が行った導入目的明確化サポートは、まさにその意識を高める作業。**こうした作業を丁寧に進めてきたということをしかりとPRすることで、他の地域との差別化を図れるのではと考えるようになっていた。**

本当に知りたいのは「関わる人の意識と心意気」

関わる人の意識をPRするために、まんのう町はこれまで行ってきた導入目的明確化サポートをWEB上で公開した。地域課題の選定、ビジョン・ミッションの設定、地域現場の視察などなど、地域住民と行政職員とで一緒に進めてきたことを、さぬきの輪WEB上に公開。他自治体が「こんなミッションです」や「お給料が他よりも高いです」とPRする最中、「**うちはまだ決まってません。今地域住民の皆さまと一生懸命決めてます**」とPRしたのである。準備段階を公開することは、勇気がいることだったが、その効果は大きかった。記事を公開したさぬきの輪WEBでは通常の記事の約2倍の人にリーチしたと共に、Facebookでもかなりの数のいいねとシェアを集めることができた。

一定の反響が得られたのには2つの理由があると考えている。「**準備段階をPRしている自治体は他に無かった**」ということと、「**地域おこし協力隊希望者が、本当に知りたい情報だった**」ということ。1つ目はシンプル。全国でたくさんの募集がある中で、「こんな準備をしてきました」という部分を強調してPRする自治体は他になかった。新しい切り口の物珍しさから、さぬきの輪WEB等を見に来てくれる方も多かったのではないだろうか。

2つ目の理由の方が大切だったと考えている。地域おこし協力隊希望者は、それぞれの自治体がどんな心構えで準備を進めているのかを知りたかったのではないだろうか。地域おこし協力隊の課題の多くが「**地域と隊員の想いのミスマッチ**」が原因で起こっている。地域（行政&地域住民）が求めることと、隊員の求めることにズレがあると、お互いへの不信感につながってしまう。こうしたズレは、受け入れる側の準備の質に大きく影響を受ける。**いかにズレを小さくするか、あるいはズレがあったとしてもしっかりと修正できるかどうかは、どれだけきちんと事前の準備を進めてきたかにかかっている**。しかし、各自治体がどのように準備を進めてきたのかは、応募者側には分からなかった。募集要項やHPだけでは、どんな心構えで地域おこし協力隊を受け入れようとしているのかは読み取れない。その状況を打破しようと考えたのが、まんのう町の試みだ。「行政職員と地域住民がいかに準備を進めてきたか」「どれだけ想いを共有できているか」これらを見ている側に分かるように発信。「どれだけきちんとしたミッション内容であるか」や「こんなにやりがいがあります」という事には、ほとんどこだわらなかつた。ミッション内容は常に変化するものだし、「やりがい」は本人がどう感じるか次第だと割り切った。それよりももっと普遍的な、**関わる人の意識・心意気の高さをPRすることに徹した**。

一番大切なのは「気持ちが前のめりになること」

導入目的明確化サポートを地域住民と行政職員と共に進めてきた際、このサポートを実施して良かったと、最も実感する場面があった。それは、行政職員の口から「**ここまで準備したら、絶対に地域おこし協力隊に来て欲しい**」という言葉がこぼれた時だ。その言葉は、**地域おこし協力隊受け入れの業務を前のめりに取り組んでいることを表している**。地域住民についても同じだった。時間をかけながら何度も何度も「何故地域おこし協力隊が必要なのか？」という確認作業をしたことで、「何としても来てほしい！」という気持ちになっていた。私はこうした「**当事者の気持ちが前のめりになる**」ことこそが**導入目的明確化サポートの最も重要なことだと感じている**。

地域おこし協力隊は、人が中心の事業のため予期せぬことが起こるのは日常茶飯事。法律や慣行に沿って進めていけば良いというものではない。それに関わる行政職員及び地域住民は、その場その場で様々な判断をしながら、地域おこし協力隊と共に歩みを進めていく必要がある。その時、重要なことは「**心の通った判断**」ができるかどうかということ。前例や法律、慣行にとらわれず、**地域おこし協力隊と地域の未来を見据えた判断ができるかどうか**。地域おこし協力隊を通じて実現したい地域の未来は、こうした判断の積み重ねの先に見えてくるもの。そして、「心の通った判断」をするためには、**関わる人た**

ちの気持ちが前のめりになっている必要がある。「何故地域おこし協力隊を導入するのか？」を明確化するために実施する本サポート。しかし、「何故？」を明確化することが本質ではない。見栄えの良いビジョンやミッションを設定することでもない。**それ通じて地域おこし協力隊に関わる人の気持ちを前のめりにし、本気を引き出すことが最大の目的だと気づくことができた。**

幹ができているから大丈夫

導入目的明確化サポートにおける最大の目的を達成できたまんのう町に、素敵な地域おこし協力隊が来てくれたのは言うまでもない。前回の募集では0人だった募集に、たくさんの方が応募し、より地域のビジョン・ミッションに共感できている人を2人採用することができた。地域おこし協力隊は採用がゴールではない。むしろ大変なのは、採用後、実際に人をマネジメントするようになってから。しかし、まんのう町の場合、あまり心配することはないと考えている。何故なら、関わる人たちが前のめりに関わり、ビジョン・ミッションも共有できているから。お互いが目指すべき姿に向かって力強く歩みを進める。細かな方法や進め方の違いで、すれ違うこともきっとあるだろう。それでもお互いの想いが理解できる状態であれば、立ち止まることはない。**地域おこし協力隊、行政職員、地域住民の3者にとって、有意義な経験になるだろう。**





第4章 今後の課題と取り組み

平成27年8月から約2年半、香川県の地域おこし協力隊としてこれまでに取り上げてきたような様々な事業を行ってきた。地域おこし協力隊同士のネットワーク構築や地域おこし協力隊の認知度向上には一定の貢献ができたのではと考えているが、まだまだこれから取り組むべき課題も多い。数ある課題の中でも特筆すべき3つの課題について取り上げたい。

今後の課題1「コーディネーターの必要性の確立」

コーディネーター事業は**各行政職員のみなさまのご協力があって初めて実現するものばかり**。事務連絡から旅費の手配、メディアへの協力など、全て行政職員の理解がないと実現しないものである。中でも連携が必要なのが、我々が最も力を入れていきたいと考えている「**導入目的明確化サポート**」。本サポートは、地域おこし協力隊を導入する前の自治体と協力して丁寧に準備を進めていくもの。スタートする際のきっかけは基本的に自治体側からのお声かけである。導入を検討している段階で「コーディネーターに相談してみよう」と思っていたら初めて我々に声がかかる。本来、地域おこし協力隊の導入は基本自治体が独自に行うもの。県やコーディネーターの意見を仰ぐ必要もない。行政職員の皆さまに必要と感じていただかない限りは、そもそも導入準備に携わることはできない。しかし、我々はこれまでたくさんの地域おこし協力隊の方や行政職員の方とお話させていただき、地域おこし協力隊事業における特徴の違いや長所・短所などを拝見した。そうした知見は、これから地域おこし協力隊を導入する自治体のお役に立てるのではと考えており、ぜひ積極的に導入準備に携わっていききたいと考えている。香川県内でも、地域おこし協力隊の導入に際して、我々コーディネーターにお声かけいただくケースはまだまだ少ない。コーディネーターの必要性をまだまだ感じていただけていないのだろう。これは我々の実力不足と情報発信不足によるもの。皆さまに必要性を感じていただくためにも、これからもコーディネーターの取り組みについてきちんと情報発信していく必要があるのと同時に、お声かけいただいた自治体にしっかりと**丁寧に寄り添いながら結果を出し続けることが必要**だと感じている。この積み重ねの先に、地域おこし協力隊コーディネーターの役割の確立と地域おこし協力隊事業のさらなる充実が見えてくると考えている。

今後の課題2「OBOGとのさらなる連携」

今後は現役地域おこし協力隊のみならず、**OBOGとも上手く連携する仕組みをつくっていく必要がある**。香川県の地域おこし協力隊の歴史はまだまだ浅い。OBOGも10人程度しかおらず、これから少しずつ歴史をつくっていく段階。そうした背景もあってこれまでは地域おこし協力隊のOBOGで連携する機会はほとんどなかった。地域おこし協力隊を退任すると、地域おこし協力隊同士のネットワークと

のつながりが希薄になってしまうケースがほとんど。今後は少しずつOBOGとの連携体制もしっかりと構築していきたいと考えている。

地域おこし協力隊としての3年間は、地域住民や行政職員と足並みを揃えながら歩いていく期間。その間に地域おこし協力隊は多くのことを経験し、多くのことを学ぶことができる。プレゼンテーションスキルやファシリテーションスキルなどのコミュニケーションスキルはもちろん、農業や観光など、専門分野の知見も広げることができる。OBOGとの連携体制がしっかりと構築できていれば、こうした豊富な経験・スキルを次世代にも継承していくことにもつながるだろう。人脈の継承も非常に大切。これまでの取り組みの中で培った地域での人脈も、OBOGとの連携体制において出来る限り引き継げるような仕組みは必要だろうと考えている。「あなただから協力する」という言葉に象徴されるように、地域で活動するうえで、人脈が大きな意味を持つことはここで説明するまでもない。先輩地域おこし協力隊から後輩地域おこし協力隊への人脈を含めた各種引き継ぎは、各地域でそれぞれ行っていくべき事柄。地域ごとにノウハウや人脈を継承しながらさらに深めていく作業だろう。**我々コーディネーターの役割は、そうやって縦に深まった関係性を、横に広げていくことだと考えている。**具体的にはSNS上でしっかりとつながれる仕組みをつくるのはもちろんのこと、年に数回程度、実際に顔を合わせる機会も設けられたらと考えている。そうしたきっかけを通じて、**OBOG含む地域おこし協力隊同士の連携体制をさらに充実させていきたい。**

今後の課題3「地域おこし協力隊コーディネーター事業の主体」

最後の課題は、**地域おこし協力隊コーディネーター事業の主体**について。我々香川県地域おこし協力隊コーディネーターも地域おこし協力隊として、香川県に雇用されている。これには大きなメリットがある。地域おこし協力隊コーディネーターは、日頃から各地域の隊員と密に連絡を取り合っている。同じ立ち場だからこそ、お互いに相談や情報交換を気軽にしやすい。生活における悩みや取り組みについての課題などその内容は様々。この時大切になるのは、多岐に渡る内容1つ1つに正しく解決策を示すことではなく、皆さまの心に寄り添いながらサポートするということ。**そうした積み重ねを繰り返すうちに信頼関係が生まれ、「何かあればコーディネーターに相談する」「コーディネーターの言う事であれば協力する」という協力体制を少しずつ構築することができた。**これは本人が地域おこし協力隊であるというメリットが、後押ししてくれた結果だと考えている。もちろん、デメリットもある。地域おこし協力隊コーディネーターも地域おこし協力隊である限り、最大で3年間という時限がある。しかし、地域おこし協力隊コーディネーターの事業は先に述べたとおり、非常に属人的な事業であると言わざるを得ない。そこで考える必要性が出てくるのが、事業を継続して行っていく際の主体を誰が担うのかということである。地域おこし協力隊コーディネーターの業務には「あなただから相談する」という属人的部分があり、任期がきたら次の協力隊に引き継ぐという繰り返して事業を継続させていくのに適した事業とは言い難い。しかし、そうした属人的な部分は割り切って、地域おこし協力隊制度を活用しながらコーディネーターを継続し続けるのも1つの手段だろう。もしくは地域おこし協力隊コーディネータ

一事業を実施するにふさわしい民間事業者に業務を委託し、そこでノウハウを継承していく手段もある。その場合は、委託財源の捻出手段や、どの民間がそれを担うのかということも考慮する必要があるなど、様々なハードルもある。いずれにしても事業の必要性・継続性を考慮して、属人的であるノウハウを上手に伝達する仕組みが必要である。

おわりに

香川県地域おこし協力隊の活動報告書を最後までお読みいただき、誠にありがとうございました。あっという間の2年半。本当にたくさんの人に支えていただき、多くの貴重な経験をさせていただきました。そのどれもが、今の自分の礎になっています。この場をお借りして感謝の意を伝えたいと思います。みなさま本当にありがとうございました。

地域おこし協力隊コーディネーターとしての2年半は、とにかく人に向き合う時間だったと感じています。地域住民や行政職員、地域おこし協力隊の想いに向き合い続け、それを言葉にしたり、形にしたりする時間でした。色んな文化や考え方に触れ、その度に自分の価値観の枠を壊しては、一回り大きく作り直すことを繰り返し行ってきました。そうして培った広い視野は、香川に来る前のそれとは比べ物にならないほどになったと実感しています。

人に向き合うと同時に、自分に向き合う時間でもありました。自分にはどんなことができるのか。常に自分自身に問い続けてきたように思います。地域おこし協力隊コーディネーターとして何ができるのかを考えることはもちろん、地域おこし協力隊後に何をするのかを考えることにも、多くの時間を費やしました。どんな自分になりたいのか？何がしたいのか？そして、それは何故か？これほど自分の生き方に向き合った時間は過去に無いくらいに、たっぷり時間をかけて考え抜きました。そうして考え抜いたからこそ、おぼろげではありますが、自分なりの答えを見つけることができたのだと思います。

「地域おこし協力隊という経験を通じて、得たものは？」と聞かれたら、一番に「友人」と答えます。2年半の間で、香川県内のみならず、全国で活躍する方々とお会いする機会をたくさんいただきました。特に地域おこし協力隊との出会いが多く、同じ経験をしている者同士、会ったその日から「仲間」ような感覚になる不思議なご縁が多かったように思います。そんなご縁を通じて、全国にできた友人。中には、地域の枠を超えて、一緒に新しいことに挑戦する方々もいます。そうした友人は、一生の宝になると確信しています。もちろん、地域おこし協力隊だけではありません。行政職員や地域住民の皆さんとの出会いも、かけがえのないものでした。暮らし方と働き方。誰一人同じ生き方の人はおらず、そのどれもがすてきに輝くもの。そんな気づきの延長線上に、私の地域おこし協力隊後の進路がありました。

2017年6月。株式会社 Woriks（ウォリクス）を設立しました。『「働く」という価値観の幅を拡げる』という理念のもと、人で見つける求人メディア「ヒトデ」（hito-de.com）の運営や職業紹介事業を行っています。地域おこし協力隊コーディネーターとして、「人」をPRして採用を行っていたこと、色んな生き方の素晴らしさに触れたことがきっかけで生まれた事業です。地域おこし協力隊後は、こうした事業を地道に育てていき、これまでお世話になった方々への恩返しができたらと考えています。道のりは決して平坦ではないと思います。辛い時や大変な時も多はずです。それでも、これまでのご縁や経験に感謝の気持ちを忘れずに、一步一步積み上げていきたいと思っています。

最後になりますが、改めてお世話になった皆様に感謝の意を述べて終わりにしたいと思います。県庁にとって初めての地域おこし協力隊である私を、快く受け入れてくださった香川県地域活力推進課の皆様、一緒に悩んだり励まし合ったりした地域おこし協力隊の皆様、地域おこし協力隊受け入れに向けて、一緒になって真剣に考えてくださった行政職員の皆様、事業や生き方について、色々なアドバイスをくださった皆様、本当に本当にありがとうございました。そして、これからもよろしくお願いいたします。

香川県地域おこし協力隊 秋吉直樹



香川県地域おこし協力隊活動報告書
「地域おこし協力隊コーディネーターとしての取り組み」
2018年3月発行 香川県政策部地域活力推進課
〒760-8570 香川県高松市番町四丁目1番10号
TEL : 087-832-3105 / E-mail : chiiki@pref.kagawa.lg.jp